

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 1章 1～9 節

○前回はコリントの信徒への手紙一について概論的な学びを行った。今回からいよいよ一つひとつの具体的な章節を取り上げて、その中身を見ていく。今回取り扱う 1:1～9 は手紙の書き出し部分に当たる箇所。

- ・パウロの手紙では、その書き出しの部分の調子で手紙全体の内容が予感できるものとなっている。たとえばガラテヤの信徒への手紙では、書き出しの部分で相手の信仰状態に対するパウロの厳しい叱責の調子が見て取れる。これとは対照的にテサロニケの信徒への手紙一やフィリピの信徒への手紙は、好意的な喜びの調子で書き出しの部分がつづられている。既に学んだローマの信徒への手紙の書き出し部分も、パウロとローマの教会との関係をそのまま反映するものとなっていた。コリントの信徒への手紙一においても、コリントの教会に対するパウロの態度をこの書き出しの部分からほぼ完全に読み取ることができるようになっている。

【注解】

〈挨拶(1:1～3)〉

○1 節：パウロはこの時代の一般的な習慣に従って、発信人、受信人、祈りの三要素を含む挨拶の言葉で手紙を書き出している。この挨拶の中には「キリスト・イエスの使徒としての確固とした自己理解と、「神の教会」についての深い洞察が示されている。

- ・「神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロ」

→パウロは自分のことをこのように理解していた。

※「使徒」という言葉は、生前のイエスと共に生活した者の中から選ばれた「十二人」（十二使徒）という狭い意味で用いられることもあるが、パウロはより広い意味で「使徒」という言葉を用いている。彼にとって「使徒」とは、復活の主を見、福音宣教、教会の形成と指導という特別な使命を与えられている人々に他ならない。そしてパウロは、自分の使徒職が「神の御心」に根拠を持ち、キリスト・イエスが自分を召された事実を強調して自らの使徒職の権威を確証している。

- ・「兄弟ソステネから」

→ここでコリントの信徒への手紙一の共同発信人として、「ソステネ」という名前が出てくる。これが使徒言行録 18:17 に出てくるソステネと同一人物かどうかは不明。

※「兄弟」→同信の仲間を指し、ここではパウロの同労者という意味が込められている。

- ・このように連名で出されている手紙にはコリントの信徒への手紙二、フィリピの信徒への手紙、フィレモンへの手紙、テサロニケの信徒への手紙一があるが、テモテがここに出てこないのは、この時既にパウロのもとからコリントに派遣されていたからであろう。

○2 節：受信人について記されている。

・「コリントにある神の教会へ」

→コリントの教会が「神の教会」と呼ばれている。コリントの教会はその起源も現在の存在も、まったく神によっている存在であった。それはどの教会においても同じである。教会の本質は神との関係の中でしか捉えられない。パウロは 10 節以下に記されているようなコリント教会のあらゆる現状にもかかわらず、いやそうした現状であるからなおのこと、それでも教会を教会としてくださっている神様の恵みの事実を思わざるを得なかった。その思いをこの短い言葉から感じ取りたい。

・「すなわち、至るところでわたしたちのイエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々へ。」

→「コリントにある神の教会」がこのような人々と言い換えられている。教会が建物のことを指すのではなく、このような人々の群れ、共同体を指すことがここからもわかる。

・「聖なる者とされた」

→「聖」という言葉は倫理的道徳的に聖いとかそういうことではなく、「神に属するものとされた」、「神の主権による神の領域に入れられた」という意味である。

・コリント教会の人々は「イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人と共に」主イエス・キリストに贖い出され、神に属する者とされた人々であり、主に向かって生きるキリストのからだという新しい存在に移された共同体に他ならない。

・「イエス・キリストは、この人たちとわたしたちの主であります。」

→教会は一切の人間の差別を越えるものである。コリント教会はこの公同の教会の豊かな交わりの中に生かされていた。

・パウロを使徒として召された神様はコリント教会の人々をも召し出し、「神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられた」。このように恵み豊かな神様の召しの事実が、手紙の発信人と受信人の両方の存在の根拠であり、両方を固く結びつける基盤であった。

○3 節：「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」

・パウロは神様の召しの事実を立て「恵みと平和」を、その源である御方に目を注ぎながら祈っている。神様を父と呼び、イエスを主と告白する初代教会の信仰告白の中心が挨拶の言葉の一部として実に自然に表現されている。

〈真実な神への感謝(4~9 節)〉

ここから神様に対する感謝がつづられていく。

○4 節：「わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けたことについて、いつもわたしの神に感謝しています。」

→パウロにとってはコリント教会の存在そのものが「キリスト・イエスによって」彼らに

与えられた「神の恵み」の現れに他ならなかった。キリスト・イエスの中にあるすべての恵みは聖霊の豊かな働きにより、また福音宣教を通して、キリストと一体とされた教会の中に現実のものとされている。福音宣教の使命に生きるパウロは、この事実をいつも感謝するのである。

○5節：「あなたがたはキリストに結ばれ、あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされています。」

→コリントの教会は「キリストに結ばれ」、キリストの体となり、交わりを持ち、さらにキリストの中に生きるものとして「豊かにされ」た。その豊かさはすべてに及ぶものだが、パウロはここで特に「言葉」と「知識」の賜物について語る。

- ・「言葉」＝福音宣教の内容としての言葉
- 「知識」＝伝えられた福音の理解のこと

○6～7節：「こうして、キリストについての証しがあなたがたの間で確かなものとなったので、その結果、あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れを待ち望んでいます。」

→パウロによって宣べ伝えられた福音、「キリストについての証し」は聖霊の働きのゆえに、コリントの教会の人々に信仰をもって受け入れられた。今や福音に生きるコリントの教会の存在そのものが福音の真理を証しするものとなっていた。

- ・ただしこうしたコリント教会の豊かさは、宣べ伝えられた「十字架の言葉」(1:18)から切り離すことはできない。また彼らの「言葉」も「知識」も、宣べ伝えられ、受け入れられ、それによって生きるべき「十字架の言葉」との生きた関わりにおいてのみ意味を持つ。それゆえ「十字架の言葉」から切り離して「言葉」や「知識」を誇る者に対しては、パウロはこれから手紙の中で真っ向から断固として戦っていく。このようにパウロの感謝の言葉の中に、既に彼の戦いの姿勢が明らかにされている。
- ・キリスト・イエスの福音が宣べ伝えられ、受け入れられ、それによって生きる「その結果」、コリントの教会の人々は「賜物(=☉カリスマ)に何一つ欠けるところがな」いものとされた。そして豊かにされた者、欠けるところがない者として自己満足に陥ってしまうのではなく、熱心に「主イエス・キリストの現れを待ち望んでい」る。つまり、コリント教会の人々は「主イエス・キリストの現れ」の時における完成を目指して、その途上に生きる者なのである。それは教会に与えられた偉大な賜物であるキリスト・イエスの苦しみに与って生きることを意味している。コリント教会の人々は、キリストにあるこの望みに生きる時にのみ、豊かにされた者、欠けたところのない者なのである。それゆえ、福音が指し示すキリストの希望から目を離して、今現在の自らが完璧な存在であるとして自らの存在に自己満足しようとするあらゆる傾向に対して、またキリストにある希望を否定するあらゆる偽りの教えに対して、パウロはこの手紙の中で激しく戦っていく。

○8～9 節：「主も最後まであなたがたをしっかり支えて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、非のうちどころのない者にしてください。神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。」

→パウロはここで未来に目を移して神様に感謝をお捧げする。

- ・コリント教会の人々は神様ご自身の力強い働きによって、「主イエス・キリストの日に、非のうちどころのない者に」される。このように神様が教会を最後まで導かれるということがパウロの確信であり、祈りの基盤であり、喜びの源であった。
- ・「主イエス・キリストの日」＝キリスト再臨の日、最後の審判の日、
神の国の完全な成就の日

- ・コリントにおけるパウロの論敵は終末は既に来ていて、将来的な終末や復活はないと主張して、教会内にうわついた熱狂的な空気をもたらし、様々な問題を発生させていた。しかしこれに対し、パウロは終末は将来に属するものであり、信仰者の完成にはまだしばらく間があり、最終的完成まで主に支えられ試されつつ歩み続けることを強調する。
- ・「神は真実な方です。」

→神様が真実な方であることは、この神様がその民の救いを実現される歴史を通して明らかとなる。ロマ書9～11章に記されているような壮大な救済史観を持っていたパウロにとっては、より一層この確信が強かったことだろう。

- ・この真実なる神様の召しによって、「あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられた」とパウロは神様に感謝する。これがコリントの教会に対するパウロの教会観に他ならなかった。
- ・教会は真実なる神様の召しによって神の子、主イエス・キリストとの交わりに招き入れられた人々の礼拝共同体に他ならない。この人々は現実の生活の中で全存在をもってキリストと交わり、日々キリストの苦しみに与り、やがてはキリストの栄光に与っていくのである。

○今回の聖書箇所から思うこと

- ・エクレーシア(教会)、コイノーニア(交わり)、ディアコニア(奉仕)

エクレーシア(神様によってこの世から呼び集められた礼拝共同体である教会)は、コイノーニア(交わり)の共同体である。イエス・キリストとの親しい交わりの内に入れられ、同じキリストの体である仲間と親しく交わっていく。またエクレーシアのコイノーニアはディアコニア(奉仕)と大きな関わりを持っている。エクレーシアに仕え、互いに仕え合い、豊かなコイノーニアを形作っていくのである。